
冒険者かく語りき ~トレジャーハンター修行中~

小坂みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冒険者かく語りき ～トレジャーハンター修行中～

【Nコード】

N8943Y

【作者名】

小坂みかん

【あらすじ】

玉藻&土鍋ご飯さんのWizardry Onlineのリプレイ小説「冒険者かく語りき」の外伝です。

土鍋ご飯さんと同居している私。

PCが一台しかないため、私のハル君と土鍋ご飯さんのミューちゃんやインナさんが一緒に冒険するのはいつになることやら……。

Wizardry Onlineはgame potさんの提供
する基本プレイ料金無料のMMOです。

この作品はpixivでもお読み頂けます。

冒険開始から、初めての畏解除成功まで（前書き）

本日、初めて畏解除に成功致しました。あまりの嬉しさを記念して、土鍋ご飯さんに倣ってリプレイを書いてみました。キャラクター設定の部分はもちろん創作ですが、プレイ中の心情はほとんど素です。

冒険開始から、初めての罫解除成功まで

「男エルフで盗賊？何か、やつらしい！宝箱なんかはクールに軽々罫解除しちゃって、女の子には『君の瞳は宝石のように美しい』とか言っちゃって、お宝も女の子も選り取り見取りってわけ？」

「はん。馬鹿馬鹿しい。女なんかよりも、本物の宝石の方が百万倍も美しいね。俺はね、俺のようにうつつくしい宝石様にお目にかかりたいだけなの」

「うわ、出た。ナルシスト発言。あんた、そんなんじゃあ、いつまで経っても独り身よ？」

「うるせえな、放っとけよ」

ハルはかつて姉貴分とした、そんな会話を思い出しながらガツクリと肩を落とし、深いため息を吐いた。そして背中なたかる虫を払いのけながら急いで立ち上がると、安全な場所へと移動しながら荷物を取り、回復薬を煽るように飲み干した。

「ああ、くそ！また毒針食らっちゃったよ！ム力つくな！！」

思いがけずそう叫び、いまだ追ってくる虫へ八つ当たりのように薬瓶を投げつけると、彼は街へと戻るための梯子めがけて走り出し

たのだった。

街に戻つてくると、ハルは荷物の中を覗き込み、顔をしかめさせた。戦利品は僅かな回復薬と石と、雀の涙ほどの端金。あとは装備が出来るかどうか分からない靴がいくつかと杖だ。どうせ靴は自分の職業では装備出来ないものはずだし、石はキラキラと綺麗に光り輝いてはいたが、所詮はただの石である。宝石にはほど遠い。この石を大量に集めると宝箱の鍵を作つて貰えるなどという噂も聞きはしたし、実際にそれらしい宝箱も目にしたのだが、自分の財布の中身を見ると銭に変えてしまった方が良さそうだった。彼は「靴と一緒に、石も売っちゃおう」と心の中でごちると、杖に目をやった。宝箱の罨解除に失敗して毒を受けつつも、何とか手にした杖だ。良いものであつて欲しい。ただ、この前石つぶてを食らいながら手にした杖は、ささくれだつてボロボロに朽ち果てた二束三文にもなるかどうかのものだった。今日手に入れた杖も同じように汚らしい。…いつまで見つめていても、金にはなってくれない。今度こそ、良いものでありますようにという思いを胸に、彼は道具屋へと歩き出した。

「ああ！やっぱり今回もシヨボかった！こんなんじゃあ、いつまで経っても装備整えらんねえよ！！」

道具屋で靴と杖を鑑定してもらったのだが、やはり自分が装備出来ない靴と、この前と同じ杖だった。道具屋で売っている武器や装備は、いまだに宿にすら泊った事がなければ酒場を利用した事も無い自分には到底出せない価格だった。以前、姉貴分が「露店販売を覗いてみなさいよ。結構安くいいものがあることがあるわよ」を言っていたが、この街に集まってきている冒険者は、もうかなりの手練となっているのか、露店にも彼のレベルで装備出来るようなものは売っていない。「このままじゃあ、本当にいつまで経っても装備が整えられないから、もっと経験値も金も稼げる依頼を受けようにも受けられないし、レベルも上げられない」と彼がうなだれていると、タイミング良く郵便が届いた。姉貴分からの小包だった。

戦士をやっている姉貴分は良い仲間と巡り会ったようで、仲間達と着々と冒険者レベルを上げていた。そのため、どんどんと低レベルの装備が要らなくなるようで、姉貴分は装備が要らなくなる度に彼に合うサイズに手直しをして送りつけて来た。たまに「最初のダンジョンで盗賊が装備出来るモノ、ゲットするの大変でしょう?」と言って、わざわざ露店をチェックして見つけて来てくれもする。姉貴分に頼りきりなのは情けないと思いつつも、正直大変ありがたかった。ハルは装備中の「毒を受けにくくなる」という小汚い皮鎧を脱いで届いたばかりのローブを着込むと、再びダンジョンへと潜ったのだった。

姉貴分からのありがたい施しのおかげで防御力も上がり、ギルド

から討伐を依頼されている盗賊団の下っ端も何とか苦勞することなく倒せるようになってきた。持ち物を頂戴してみると、鎧を手にする事が出来た。街に戻り鑑定をしてみると、以前姉貴分からお下がりで貰ったものと同じ「毒を受けにくくなる」という皮鎧だった。既に持っている物ではあったが、自分で手に入れたということが何とも感慨深かった。

不用品を売り払った金が貯まり、ようやく剣だけではあるがギルドから配給される初級冒険者用の剣から卒業することが出来た。これで攻撃力も少しは上がる。ハルは心なしか顔をほころばせると、再びダンジョンへと戻っていった。

もう少し虫退治で経験値を稼ごうと思っていたにも関わらず、ダンジョンの入口付近でお目当ての虫に出会う事は滅多になかった。もう少し、奥に行きたい。そう思っていた矢先に姉貴分からまたもや小包が届いた。結構見た目の良い皮鎧と、暗器と呼ばれる、いわゆる「ナツクル」だった。暗器は両手に装備するため防御が出来ない分、身軽に動けるので攻撃の手数が増える。これなら「決戦場」と呼ばれる力試しの場もクリアして、ダンジョンの更に奥へと進めるようになるのでは。そうと決まれば、途中で放棄していた「決戦場へと続く道を拓くための仕掛けの攻略」を再開させよう。ハルはそう思い立つと、まだ押していない四つ目のボタンのある部屋へと向かった。

しかし、思うように行かない。ボタンのある部屋に辿り着く前に、盗賊頭に殺される。何度挑んでも殺される。初心者には神の加護があり確実に蘇生出来るとはいえ、死ぬというのはやはり気分のいいものではない。この前レベルが3になった時に盗賊業には重要な運の数値が一つ下がった。こんなにポコポコと死ぬのは、運がないからなのだろうか。そんなことを考えていると、ふとレベルが上がった時に授けられるポイントについて思い出した。新しく技を覚えたり、既に覚えている技を強化するにはこのポイントを消費する必要がある。もう少し高レベルになったら割り振ろうと取ってあったポイントを使って、何とか今抱えている問題をクリア出来はしないだろうか。そう思ってギルドから渡されていた「スキルツリー」なるものを広げて見てみると、既に覚えることが可能な技の一つに「ステルス」というものがあつた。何でも、一定時間姿をくらませた状態になれるらしい。

「何だよ、あるじゃん!!」

ハルは思わずその声を上げると、恥ずかしそうに頬をほのかに赤らめさせた。冒険者たる者、常に注意を払えと姉貴分が口癖のように言っていたのを思い出したのだ。彼はそそくさと「ステルス」を覚えると、スキルツリーを荷物にしまい込んで四つ目のボタンを攻略しに向かったのだつた。

何とか決戦場への道を拓き、その決戦場もクリアしてレベルが4になった。ダンジョンの更に奥へと進めるようになると、盗賊団の一味の追剥ぎ男に遭遇するようになった。こいつを五人片付けると結構な経験値と金が貰える。虫も奥の方がよく湧いた。おかげ様で、レベル3から4へと上がる時よりも楽に5へと上がることが出来た。

レベルが5に上がってすぐのことだった。ダンジョン内をうろつろとしてみると特殊な鍵が施されているわけでもなさそうな未開封の宝箱を発見した。…今日こそは、宝箱の罫解除を成功させたい。そう思つて宝箱の前にひざまづくと、追剥ぎ男に見つかった。

「宝箱！宝箱に集中させるよ！うつとおしい！！」

目の前の折角のお宝が他の冒険者に持つて行かれるところを想像して苛々としながら追剥ぎ男を殴り倒すと、ハルはいそいそと宝箱の前へと戻った。この前はどんな罫か見定めは出来ていたものの、罫を解除出来たという手ごたえが低く、ままよとばかりに鍵を回してみたら案の定失敗した。その前はどんな罫か見定めている間に罫が作動してしまつて失敗した。だから、慎重に、慎重に…。動悸が激しくなり、呼吸が荒くなるのを抑えながら見定めを続けていると、今までに感じた事もないような手ごたえが得られた。

（これなら、いけるか…？）

はやる気持ちを抑えつつ、ゆっくりと宝箱の鍵を回す。カチリと

いう聞いたことのない音が鳴り響き、罨が作動することなく宝箱は開いたのだった。ぱっくりと開かれた宝箱をハルは束の間見つめると「開いたー！！」と叫びながら宝箱の中を覗き込んだ。

「うわ！うそ！開いた！罨が作動せずに開いたよ！！なんか、ようやくシーフを名乗れる気がするよ！うっわー！五つも物が入ってる！すっげー！！！」

彼は大はしゃぎしながらいそいそと宝箱の中身を荷物へとしまい込むと、あともう少しでミッション達成となる追剥ぎ男の討伐と虫退治を手早く終わらせ、意気揚々と街へと帰っていった。

ルンルン気分で街へと戻ってきた彼を待っていたのは幸福な気持ちではなく、落胆だった。鑑定の結果、宝箱に入っていたのは例の毒に強い小汚い皮鎧と、壊れた剣と盾、装備品に装着させると体力が微量に増えるという不思議な石、それから毒消しの薬だった。体力増加の不思議な石は試供品でギルドから貰える物の方が質がいいだから正直、売りとばした方が嬉しい気分になれる。まあ、冒険なんてそんなもの。そのうち挑戦できるダンジョンも増えて、もっといいものも手に入るさと肩を落としていた彼は姉貴分からの手紙を読んで更に機嫌が悪くなった。

冒険者には冒険者としてのレベルの他に魂の成長度合いを表した「ソウルランク」というものがある。手紙によると、姉貴分は既にソウルランクが4になったとのことだった。レベルがどんどん引き離されるのはまだいいとして。癢にさわるのは「カイ」だかという

仲間の戦士だ。どうやら姉貴分は蘇生に失敗して灰になった際にこの戦士に助けられ、それ以来、彼のこと気がなくなっていらしい。今までは自分を心配してくれ気遣ってくれる内容だったのだが、今となつては大半がカイがどうしただのこうしただのという内容で埋められた手紙を思わずクシャリと握りつぶすと「だから、カイって誰だよ！」とハルは叫んだ。

一番盗みたかったアメジストを、見知らぬ戦士に奪われかけている。冒険者としての道のりはまだ遠く長い盗賊の目の前に、大きな難問がまた一つ立ち塞がったのだった。

冒険開始から、初めての畏解除成功まで（後書き）

…最近、土鍋ご飯さんが目の前で「カイさんが」「カイさんが」言う度に、本当にイラツと来るようになってきました。ちくしょう、出来ることなら、人狩りしてやりたい…。でも、私は良い子なので、犯罪には手を染めないんだもん！ふーんだ！！はあ、カイさんなんて気にしないで、自分のペースでゆっくりレベル上げようっつと…。

小断 数値とユニオン（本文中に誤字等発見。PC落としてしまったので、起き

もう寝ようと思い、土鍋ご飯さんにPCを明け渡したら、ハル君的には事件と呼べることが起こりました。なんか、寝付けなくなってしまうので、何となく投稿します。ちなみに、数値関連についてはネタバレを含みますので、まだ最初のダンジョンをクリアしていない人は「回れ右」をお願い致します。

小断 数値とユニオン（本文中に誤字等発見。PC落としてしまったので、起き

ハルは街に戻ってくると、何とはなしに財布にしまつてあつた冒険者証を眺め、思わず「え!？」と声を上げた。レベル4から5に上がるのは案外楽だったのにも関わらず、5から6に上がるためには現在蓄積されている経験値の倍は稼がないといけないということが冒険者証の指標には表示されていた。

「えー…うそ、あと2200つて、追剥ぎ男で換算したら22回分?ダンジョンうろつろしてたらアツと言う間に貯まるかなあ?」

そのように呟きつつ眉間に皺を寄せながら冒険者証と睨めっこしていると、彼はある数値が変動していることに気がついた。自己の属性を表す表示のところの「秩序」の項目が若干ながら増えていたのである。

属性というのは何かしらの職業に就く際などにも関係する、いわゆる自己の「人柄」のようなもので、三種類に分けられる。「秩序」と「中立」と「混沌」だ。秩序は分かりやすく言うと「真性のイイ人」で、中立は「世の中には白黒だけではなく、灰色というものも存在するということが分かってる」という、まあどちらかというところと普通の人、そして混沌は「良くも悪くも個性的」とでも言うおうか。ちなみにハルの属性は中立で、姉貴分は混沌だ。姉貴分とよく行動を共にしているというリアというプリーストも姉貴分と同じく混沌属性だと聞いたことがある。姉貴分から聞いた限りの彼女はともおつちよこちよいで、ほぼ全ての罫に引っ掛かり、ドジを踏んだのを可愛らしい笑顔で誤魔化す割には腹黒いらしい。姉貴分もしっ

かりしているようでかなり抜けているところがあるのを思い出したハルは「混沌属性って、もしかしてドジの別名？」と首を傾げた。

そのようなわけで各々「属性」というものを持ち、それも冒険者レベルと一緒に記載されているのだが、ハルの冒険者証には今まで0と記載されていた「秩序」の欄が10となっていたのだ。そして100だったはずの「中立」も110に増えている。

(俺、何かしたっけなあ…?)

宙に視線を投げながら今までの冒険を思い返してみたハルは、あ
ることを思い出した。ダンジョンの中で二度ほど、ギルド以外の依
頼を受けた事があったのだ。そして、その依頼を達成した際に依頼
主に質問をされ、何とはなしに返事をしたことがあった。大切にし
ていた人形を落としてしまったという男の代わりに人形を探してき
た時には、その人形が本当に大切にされていて、彼にとっては珠玉
の宝石のようなだろうというのが伝わってきた。だから「その人
形、あなたに愛されてるな」と笑って人形を手渡してやった。また、
暗闇でペンダントを落としたという男の代わりにペンダントを探し
てきた時には、「暗闇の方が落ち着くよね？」と聞かれて、「日向も
暗闇も好きだけど」と答えた。暗闇にはここそこに危険も潜んで入
るが、ひっそりとお宝が眠っていることもある。そして陽の下では、
姉貴分が愛する農作物が煌めき輝いている。だから暗闇も日向も、
本当にどちらも好きだったから、そう答えたのだ。どちらの回答が
どのように数値の変動をもたらしたのかは分からなかったが、その
くらいしか変動の理由は思い当たらなかった。まあ別に、このくら
いの変動じゃあ何かに影響が出るといってもないしと思いつながら
冒険者証を財布にしまうと、ちょうどまた姉貴分からの郵便が届い

た。今日は小包ではなく、手紙だけだった。

手紙によると、姉貴分はパーティーの仲間と「ユニオン」と呼ばれるものを作ったらしい。パーティーとはまた違う、ギルドの依頼を効率よく攻略するために気の合う仲間が集まった「同盟」のようなものだという。ユニオンを作るにあたって登録料として三万という大金が必要になるそうなのだが、姉貴分はうっかりとんでもない名前で登録を行ってしまい、慌てて登録破棄したということだった。うっかりミスで大金を失いうなだれていると、いつものメンバーがやってきて一緒に資金調達をし直してくれたそうで、なんとか無事にユニオンを立ち上げることが出来たそうだ。ユニオン名は「アザルス」の風」というそうだ。この大陸を股にかけ、風のようにさすらい、冒険者として名を上げようという彼女達にはぴったりの名前だった。「よかつたら、ハルも入る？」と誘ってくれたのは嬉しかったのだが、ユニオンに入るには直接ユニオンのメンバーと面会しなければならぬらしい。姉貴分とは常にすれ違いで手紙でしかやりとりが出来ず、姉貴分の仲間達の顔も知らないハルは大いに悩んだ。そんな状態では入るうにも、入れないではないか。どうやって姉貴分と顔を合わせようかと思案しながら手紙を読み進めていた彼は、思わず顔をしかめて手紙をクシャリと握りしめた。そもそも、ユニオンを作ったのは「今日もカイと会えるかと思ったら、彼、一向に街に顔を出さなくて。ユニオンを作っておけば専用の掲示板も使えるから、『いつなら一緒にダンジョンに行けるよ』っていうやり取りもしやすくなるし」という理由らしかった。

「だから、カイって、誰なんだよ!!!」

思わずハルはそう叫ぶと、必死に辺りを見回した。どれだ。どれ

がカイってやつだ。この街に身を寄せているのは間違いないから、もしかしたらすぐ近くにいてもしれない。レベル的に十中八九返り討ちになることは間違いないが、それでも一発殴ってやりたい。

見知らぬ戦士を探す事を諦めたハルは不機嫌そうに鼻からフンと強く息を吐くと、姉貴分からの手紙を荒々しく荷物へと突っ込み、便箋を取り出した。そして「ユニオンに勧誘してくれるのはありがたいけど、それなら顔出せ。馬鹿角」とだけ殴り書くと、便箋に彼女がよく利用しているという宿屋の住所を書き、郵便屋に叩きつけるように手渡した。

小断 数値とユニオン（本文中に誤字等発見。PC落としてしまったので、起き

…というわけで、ユニオンに誘われました。加入するためにも、ネ
カフェに行くしかないのかしらん…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8943y/>

冒険者かく語りき ~トレジャーハンター修行中~

2011年11月27日06時03分発行